

『実例詳解古典文法総覧』補遺稿⁺源氏解説

連載第 63 回 第 12.2 節～第 12.3 節

2020 年 8 月 1 日

小 田 勝

367 頁「12.2 主格」からである。368 頁の 3 つ目の◆にあげた「のづめ」の歌の例を追加する。

- ・ことさらに死なむことこそ難^{かな}からめ生きてかひなく物を思ふ身の (躬恒集)
- ・ものをだにいはまの水のつぶつぶといはばやゆかむ思ふ心の (実方集)
- ・長月の菊の重ねに霜さえて移ろひ行くか秋の日数の (瓊玉和歌集)

次例は、主格「～が」句の倒置である。

- ・潮の満ついつもの浦のいつもいつも君をば深く思ふはや我が (枕 20) <「はや」ハ詠嘆>

369 頁「12.2.1 中古における主節中に主格の「の」「が」が現れる環境」。①について、次例は「…の…らし」の例である。

- ・春風のいたく吹くらし灘の海人の釣りする小舟さし帰る見ゆ (古今六帖)

370 頁⑦の用例は、「吹きも越さなん」のように、波線を伸ばす。類例をあげる。

- ・郭公聞きわたるとも五月雨に空言^{そらごと}にだに人のなさん (信明集)

用例(1)(2)の類例をあげる。

- ・皆人の得がてにすといふ安見^{やすみ}児得たり (万 95)

上代においては、「…の…形容詞終止形+も」の句型も、主節主格の「の」が許されるようである。

- ・卷向山は継ぎのよろしも [継之宜霜] (万 1093)
- ・春されば聞きの悲しも [伎吉乃可奈之母] (万 4089)

同頁「12.2.2 中古以前における主節中の「の／が…終止形」の例」の類例をあげる。

- ・いますかりつる心ざしどもを思ひも知らで、まかりなむずることの口惜しう侍りけり。(竹取)
- ・そぞろ寒きに、主上^{うへ}の御相^{あこめ}ただ二つ奉りたり。(紫日記)
- ・蓮葉^{はちすば}の繁る池水所なみ旅の空なる人が宿さず (賀茂保憲女集)

371 頁◆の院政・鎌倉時代の例は、これ以上の挙例は不要だろうが、和歌の例がなかったので一応あげておく。

- ・川水に鹿のしがらみかけてけり浮きて流れぬ秋萩の花（匡房集）
 - ・白露のうつしの灰や染めつらん八入の岡の紅葉しにけり（堀河百首）
- この次に、節を新設する。

12. 2. 3 焦点表示(総記)の「が」(新設)

「山田が社長です。」の「山田が」は、「社長は誰か? = 誰が社長か?」の答えを表示している。このような「が」を「焦点表示」という（排他的な意を含むので「総記」とも呼ばれる）。古典語では、次のような例がある。

- (1) この境がゆゆしき大事にて侍る。なほなほよくよく斟酌あるべきにこそ。
（毎月抄・島原松平文庫蔵本）

372 頁「12.3 目的格・格助詞「を」」。用例(4)に関連して。次のような「を」も強意の間投助詞と考えられようが、そうすると「に」格を内包するということになるのだろうか。

- ・山たづの迎へを行かむ [牟加閑袁由加牟] 待つには待たじ（記歌謡 88）

用例(7)～(12)の類例をあげる。

- ・「遠方人にももの申す」と独りごち給ふを、御隨身ついゐて、「かの白く咲けるをなむ、夕顔と申し侍る。…」と申す。（源・夕顔）
- ・うちほほゑみでのたまふ [源氏ノ] 御気色を、[惟光ハ] 心疾き者にて、ふと思ひ寄りぬ。（源・葵）
- ・[中将ハ] いものしと思ひて、尚侍の君を [非難ヲ] 申し給ふ。（源・竹河）
- ・鶯の谷の底にて鳴く声を峰に答ふる山彦もなし（躬恒集）
- ・しぐれつつ移ろふ見れば菊の色をしめじめと降る雨にざりける（順集・正保版本）

[出典追加] 瓊玉和歌集①宗尊親王（1242-1274）の家集。真観撰②1264年③新編国歌大観 7/毎月抄④島原松平文庫蔵本 = 新全集 87/匡房集①大江匡房（1041-1111）③新編国歌大観 7

源氏物語（湖月抄） 解説 桐壺（8）

（増註版 16 頁、
新全集 26 頁）（帝は）一の宮をお見申し上げなさるにつけても、若宮への^①御恋しさばかりお思い出しになっては、気の許せる女房^②や御乳母などを（故更衣の里に）たびたびお遣わしになって、様子をお聞きになる。野分が吹いて^③、急に肌寒い夕暮のころ、（帝は）いつもよりも（若宮のことを）思い出しなさることが多くて、^{ゆげいのみょうぶ}靱負命婦という女官を（故更衣の里に）お遣わしになる。夕方の月の美しいころに、出かけさせなさって、（帝は）そのまま物思いに耽っていらっしゃる。このような折には^④、管弦の御遊びなどなさった時に、格別すぐれた^ね琴の音を掻き鳴らし、ほんのちょっと口に出して申し上げる言葉も、他の人とは違って（すぐれて）いた（桐壺更衣の）様子や容貌が、幻となってじっと（我が身に）寄り添っていると^⑤思わずにはいらっしゃれないにつけても、（はかない幻は）闇の中の現実にはやはり劣るのだった^⑥。命婦は宮中から下がりて更衣の里に到着して、（車を）門の中に引き入れるやいなや、あたりの様子はしみじみと哀れ深い。

（注）①「若宮の＝若宮への」。②弘徽殿側に通じてなどいない女房。③原文「野分〔ガ〕立ちて」。「若宮の御恋しさのみ思ほし出で」ていた帝は、野分が吹いたので、急に若宮のことが心配になったのである。④「このような折には」（原文「かうやうの折は」）は、3～4行下の「思わずにはいらっしゃれないにつけても」（原文「思さるるも」）に係る。⑤「つと添ひて思さるるも＝つと添ひたりと思さるるも」⑥「むばたまの闇のうつつは定かなる夢にいくらもまさらざりけり」（古今 647）による。はっきりした幻の像を見るよりも、見えない闇の中で現実に逢う方がよっぽど良いの意。